

*初めに、私の下記小文「王金璐先生との思い出」小文の日付が前後しておりますことをお伝えします。ご了承ください。承よろしくお願ひします。



その知らせは2016年5月1日、突然、飛び込んできました。文化大革命後の中国京劇界で、長靠武生(表題に説明あり)を演ずる京劇俳優の重鎮として京劇をリードされてきた王金璐先生が亡くなられたということです。

私は、東京周辺で京劇公演がある際には、その京劇を撮影させてもらっています。また、北京では今回の情報を知らせてくれた友人のルートで、北京の劇場で彼と一緒に京劇を撮影する事もあります。そのようなことで、その友人が私の興味がありそうな「京劇」や北京の裏通り「胡同」の情報を時折送ってくれていました。王金璐先生の突然の訃報は、その友人からのものでした。しかも、王金璐先生が亡くなられたその日の訃報です。

友人の情報によれば、王金璐先生は今年2016年5月1日、朝7時56分にご自宅でお亡くなりになられたとのこと。享年97歳でした。かつて、数日とはいえ王金璐先生と親しくお会いし、交流を深めた方だけに、ショックを受けました。そしてその悲しい情報が間をおかず、その当日に私にもたらされた不思議さを感じるとともに、既にはるか昔になったさまざまな事が思い出されました。

先ず最初に思い出されたことは、今でも時たま手にする王先生の自伝「武生泰斗 王金璐傳」という本に、来日公演時、私と井田さん(‘わんり

い’会員であり、私の写真仲間と共に京劇写真を撮影している)の写真が掲載されていたことでした。その写真は、‘わんりい’が、1995年5月20日(土)、町田市市民ホールで開催した「第四回京劇鑑賞会」の舞台上で演じる王先生を撮影したものでした。私が撮影の写真を王先生が気に入って下さったのでしょうか、その写真はその本の写真ページだけではなく、表紙にも同じ写真が使われており、私にとってはこの上なく嬉しく思われたことでした。

‘わんりい’は活動開始以来、京劇を紹介する活動を続け、在日の京劇俳優の皆さんを総動員しての京劇鑑賞会を度重ねて開催していましたが、「第四回京劇鑑賞会」は、毎回主役で出演の張紹成さんが、「是非、自分の師匠である王金璐先生の素晴らしい演技を日本の皆さんに見て頂きたい」とのたつての願ひで企画された特別公演でした。

その当時、著名な人であっても中国の方の来日は、入国ビザの関係でなかなか難しい時代でしたが、田井さん夫妻やその他の皆さんの協力の下、日本に招聘され、師匠と弟子が同じ舞台上で演じるという状況に、先生ご夫妻も弟子である張紹成さんも非常に喜び、会員それぞれも、海の向こうの北京から王先生を迎えて開催される京劇鑑賞会のために、それぞれの役割を担当しました。

私は、‘わんりい’の活動に関わって張紹成さんや殷秋瑞さん等京劇の俳優さんたちと親しくなったことで1993年という早い時期から京劇の写真の撮影をしていましたので、京劇界の重鎮・王金璐初来

中国戯曲学院教授として優れた京劇役者を育てた、
名「長靠武生」*「役者・王金璐先生との思い出」
先生の訃報に接して

Chang kao wusheng
*長靠武生 〓 京劇で將軍役など武術に優れた人物像を演じる役どころ。
鎧をかぶり、背には軍隊を表す旗を挿し、激しい立ち回りを演じる。

京劇写真撮影 木村武司



王先生がお気に入りの趙雲の写真

日公演でもある特別公演「第四回京劇鑑賞会」に向けたポスター用写真撮影に協力することになりました。

そのポスターの写真撮影は公演に先立つ、3月19日(日)に麻生文化センター大会議室を借りて、張紹成さん扮する趙雲を撮影しました。役者が舞台を動き回る舞台写真撮影とは違って、じっくりと三脚にカメラを据え付けて、そのカメラの前で役者さんにポーズを取ってもらうという、カメラマンにとっては超贅沢な撮影でした。公共施設での撮影の為、照明についての文句は言えませんでした。私は初めて京劇の撮影に中型カメラを使いました。中型カメラでの京劇撮影は、これが初めてであると同時に最後でした。記念の公演である為に京劇ポスターにフィルムの粒子が出ることのない様にと、今考えると真剣だったのですね…。この時、自分の師匠が来日し、同じ

舞台上で京劇を演じられるという張紹成さんの嬉しさが、彼の感情や表情に出ていたのを今でも覚えております。

第四回京劇鑑賞会は3部構成の演目で開催されました。1部は、弟子の張紹成さんが主役で水滸伝に登場する好漢・武松を演ずる「獅子楼」。2部は、長靠武生役の京劇俳優が大立ち回りをする京劇名演目・「長坂坡」で、待望の王金璐先生が趙雲役で若々しく颯爽と大立ち回りをし、3部の「漢津口」では、再び、王先生の主役で趙雲役とはがらりと異なる役柄の関羽に早変わりされて重厚に演じられました。

京劇の写真撮影の際は望遠レンズを使用することが多い為、観客の皆さんよりもその役者さんの表情や感情がレンズを通して撮影者に直に伝わって来ます。“え！この趙雲役の俳優が、数日前ご一緒に食事をした王先生?! え！本当に75歳?!”王先生が演じる趙雲のその動きは、機敏でまったく年齢を感じさせない、素晴らしくしかも感情のこもったものでした。が、次から次へと繰り出される演技に何が何だか分からず、ただひたすら王先生の演技を撮影し、舞台鑑賞する余裕などまったくない中で夢中でシャッターを切っていました。

今はフィルムカメラがほぼ退き、デジタルカメラが主流の社会になりました。デジタル画像は撮影した画像の状況を見ることが可能で、しかも撮影状態が確認できますが、フィルムでは現像をしてみないとその結果が分かりません。現像が終わったフィルムを見るまでは、不安や期待・希望が入り交じり、正常に撮影が出来ていた時の嬉しさ、喜びは、カメラマンしか分からないかも知れません。

出来上がったスライドフィルムを見て、王先生が気に入ってくれた写真が私の目に飛び込んできました。王先生の足が先生の頭より上に上がっている、前述の自伝



王先生の自伝「武生泰斗王金璐傳」表紙。右下に、私が撮影した王先生の日本公演の際の写真がある



上掲の本の表紙の元になった趙雲役の舞台写真
76歳の王先生の足が高々と上がっている

にも掲載されたその写真でした。その時、先生の演技もさることながら、素晴らしい写真が撮影出来たと、私は嬉しくて、嬉しくて仕方ありませんでした。忘れられない私の京劇写真だと自負できる1カットでした。

先生ご夫妻の日本での写真は、張紹成さんが北京に帰られる際に、井田さんと私が撮影した中から各自の好きな写真をプリントして託し、先生にお渡ししました。その数年後の1999年11月に、前述の朱継彭著による王金璐自伝「武生泰斗王金璐傳」(中国戯劇出版社)が出版され、その本に私と井田さんの写真が掲載されたのでした。「武生泰斗 王金璐傳」に掲載の王先生の舞台写真は、中国の劇場での舞台の袖であえて役者さんに見栄を切らせたポーズの写真が殆どを占める中、舞台上で実際に演じている舞台写真は、私と井田さんの写真だけで、それも私には嬉しく幸せを感じました。

私が王先生と初めてお会いしたのは、王金璐ご夫妻が来日の翌日、'わんりい'が町田で開催した王金璐歓迎夕食会でのことでした。私よりも少し小柄な方で、「この方が本当に京劇をされるの」という感じでしたが、夕食会に参加の皆さんと接する姿や、また何気ない動きにも、舞台上での役者の一挙一動を見るような、ごく自然な指や手や動きに感情表現が表れていてビックリし、私は王先生のすごさを直感させられました。

その日、井田さんが、私の分も含め色紙を用意下さり、王先生のサインを頂くことができました。王先生との貴重な思い出の一品です。

鑑賞会後の5月26日(金)、午後5時30分から麻生文化センター大会議室で「王金璐、京劇を語る」

と称して記念講演会が行われ、20日にご自身が演じられた演目「長坂坡と漢津口」の内容について、表情豊かにユーモアを交えてお話をされました。その時の通訳は、今は早稲田大学政治経済学術院教授として中国文化を担当している平林宣和さんで、当時は、ご自身も京劇を演じ、「第四回京劇鑑賞会」の第二部では劉備を演じました。

思い出は尽きません。1993年から始めた京劇撮影は、既に20年を超えました。京劇撮影を通して色々な出会いがあり、楽しい思い出が多々あります。振り返って嬉しく思うと共に、これからも京劇は私の撮影テーマとして、撮影が出来なくなるまで続けていきたいと思っています。



歓迎会で王先生と固い握手をする(井田裕明撮影)



歓迎の花束を抱えた王金璐ご夫妻



王金璐ご夫妻歓迎夕食会にて 1995年5月18日(井田裕明撮影)

王先生ありがとう。安らかに！そしてご協力して
頂いた皆さん、ありがとうございました！

(2016年8月10日)

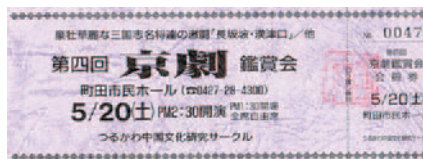
*写真の一部は、井田裕明氏のご協力を頂きました。



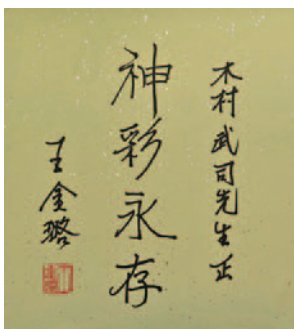
第4回京劇鑑賞会で手作りの鑑賞手引書を売る会員たち



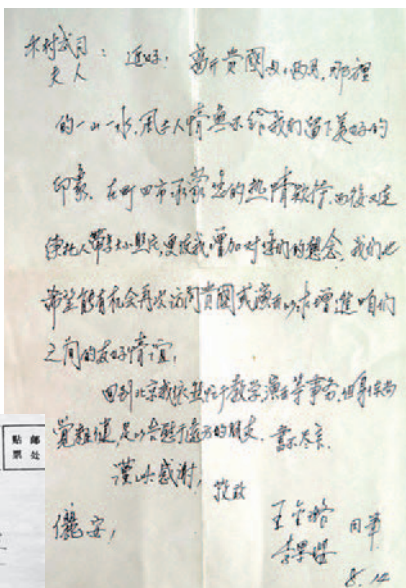
「ホテル ザ エルシィ町田」で開催のお別れ会で記念品贈呈 (井田裕明撮影)



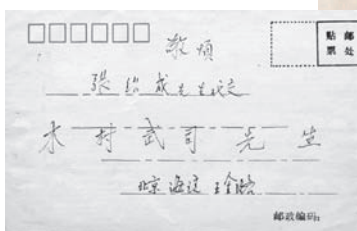
◀ 町田ホテル ザ エルシィで開催のお別れ会には、千田是也氏肝いりの「京劇研究会」(日本人による京劇上演をしている会。中国京劇院で活躍中の石山雄太さんもかつてのメンバー) 他の参加もあって60名を超え、賑やかに別れを惜しんだ。 ▶



王先生の色紙呈



帰国後に頂いた王先生からの手紙



お別れ会で会が頂いた書「菊友」は演劇ファンを意味する (井田裕明撮影)